

風のおる道

井上ふみ

風のとおり道

井上ふみ

風のおる道

©FUMI INOUE

定価 一二〇〇円

平成二年十一月五日 初版
平成三年二月二十五日 刷

著者 井上ふみ

発行者 富岡勇吉

本文組版 株式会社写研

本文印刷 明和印刷株式会社

本文付物印刷 株式会社栗田印刷

製本 東京美術紙工

発行所 株式会社潮出版社

東京都千代田区飯田橋三一―三

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

営業部・東京三三〇局〇七四一

振替・東京五一六一〇九〇

ISBN4-267-01258-X C0095

風のとおり道

風のとおり道 目次

第二章 収穫の庭

小さな祠 7

椎の実拾い 14

祖母 19

英子へ 31

父・足立文太郎 46

軽井沢にて 51

子いも 76

まあ！ほんとうに

地下の祝盃 80

歯よ 84

お月さまあつた 85

月と人参 88

人参雑感 92

大根おろし 95

どこかが違^うう 103

初夏の一日 107

四万五千回 110

夫、井上靖氏へ 112

お父さんの手術 120

主人近況 126

第二章 古いノート

除夜の鐘 129

正月三箇日 135

正月も過ぎてゆく

ボロ市へ 140

綿入れ 144

大奮闘

151

私の早春賦 153

コーカサスの乾杯

158

「無」について 161

古希の祝い 164

父の胸像 165

赤坂御苑の園遊会に 168

旧友を見舞う 171

旅の用意 173

私の誕生日 178

音楽会へ 183

茨木の頃 189

わだつみの表紙に寄せて 198

闖入者 201

初詣 206

地震 208

ノーベル賞とかゆい話 210

あとがき 220

装丁 木村裕治 水口美香
表紙カバー・生地 浦野理一 写真 田枝幹宏

第一章 収穫の庭

小さな祠

「みーちゃん遊ぼう。おかはんごと（ままごと）しようか」

私と同年で通称、山のぼんという少年がいた。

吉田山（京都）の頂上近くに、たった一軒あつた小さな茶店の一人息子で、きやしゃ華奢で気の弱い茶目っ子である。

近くに家がない山のぼんは、自然、宗忠神社の表参道である石畳の坂を下つて、子供の集まるところへ遊びに出て来ることになる。そこで一番近いのが私の家であつた。この石畳に沿つた低い土手を五、六歩上つたところに、私の家の庭に入る小さな入口があつた。土手に沿つたかなめの垣根の一部に、竹の四つ目の開きが付けてあつて、ぼんはいつもそこから声をかけ

た。

この小高い土手には一面に野芝が生えていた。上部は垣根に沿って一間ばかりの幅で平らになっていた。斜面との境目には大人の背丈ほどに刈り込まれた、がっしりした松が一行に植えられてあった。南斜面のこの土手は、晴れた日は一日中陽を受けて、恰好の松の蔭もあり、車は通らないし、通行人もない、子供には絶好の遊び場であった。

平らな場所でもまごをする子、小松に登って揺さぶる子、石の坂道に沿って造られた雨水はけ用の溝に腰かけて、おはじきや竹返しをする子。「下駄隠しちゅうねんぼ、草履を銜えてちゅっちゅくちゅう」と、自分の履いている片方の下駄や草履を石の間や草の中に隠し、鬼がそれを探し出す遊び。めんこ、陣取り、筒袖の両手を広げて石畳の坂を走り下りる子供もいて、天気の日、ここにはその頃の子供の遊びは、たいていのものが集まっていた。

表参道の石畳の両側に、桜の細い苗木が植えられたのは、この頃であった。

私が、すすすいの葉やつばなの穂が食べられることを教わって、しがんでみたのも、この土手である。神社が時たましか芝生の手入れをしないことが幸いして、そこにはいろいろな草が生え、花が咲いた。よもぎ、雀の枕、すみれ、たんぽぽ、子供たちがお灸の艾にした黄色い綿のような花が咲く母子草？ もあり、時には薄が^{すすき}あつて手を切った。土筆は^{きゅうもぐさ}見かけなかったが、季節によつては、椎^いの実やどんぐりもあつて、ままごとの材料には困らなかった。松葉は

お箸^{はし}になった。

このあたりでは男の子も女の子もみな仲よく遊んだ。それがどういうわけか、いざ喧嘩となると男と女は分れた。女組に入った男の子には、女の中に男がいるぞと、遊ぶ時のことはそつちのけにして、はやしたてた。そんな時でもぼんは女組に付くことが多かった。

ぼんの両親には以前から私の家のこまごました用事を頼んでいた。内儀さんは折れそうに細くて、愛想のいい人であった。今思えばまだ四十歳にはなっていないかつたであろうのに、もともと色が黒い上に化粧気がなく、いつも黒い上っぱりを着ていたので、私にはもう五十歳くらいに見えていた。

私は小学校へ上がる頃までは、石鳥居より下の道へ出ると車が危ないから、なるべく石段より上で遊ぶように注意されていた。そのためにあまり下の道では遊ばなかった。車が危ないといつても、人力車が自転車、或いは馬力、ふうふうと息をはずませて重い荷を曳^ひく牛車が時々通る程度であった。それにぼんの時たま、北白川の島津製作所の品のいいおばあさんが乗った黒塗りの風変りな電気自動車が、奇妙なラッパの音を鳴らして通るくらいのものであった。

小学校へ入学の日の朝、小柄だった私は、海老茶色^{えび}の小さい袴^{はかま}をつけて、母に手を引かれて宗忠神社の石段を下りていた。そこへぼんの母親が早朝からどこかへ用足しに行ってきたらしく、小走りに帰って来るのに出会った。

「おや、おや、まあ、とうさまも本年からお学校でござりましたな、これは、これは」

と、細い腰を半分にして、私の顔をのぞき込んで、いつものちよつと囁れた声で愛想よく声をかけてくれた。

「ええ、ええ、こんな小（ちい）そうでも、今日からは生徒さんになりましたよ」

と、母はにこにこしながら、私を見下ろして言った。

宗忠神社の境内を北へ抜けると、吉田神社の東参道を挟んで直ぐ向かい側は、竹中稻荷である。稻荷の参道は、右手東側が後一条天皇の御陵で、松と雑木の森に沿つてある。左右には、石の狐が台座の上から見張っている。大小の赤い鳥居のある細い石畳の道を、奉獻何年、誰々と読みながら次々潜（くぐ）つて行くと、突き当りに神楽殿、その後ろが拝殿になっている。拝殿の右手に社務所があり、その奥に水屋があつて、小ぢんまりしたお稻荷さんであつた。

水屋の四本の柱やなげしには、大吉とか、紀州皆川とか書いた木版の千社札が沢山張られてあり、黒々と書かれたり、或いは太く白抜きであつた。かけた願（が）んが成就したとか、お千度参りが済んだとか、千社詣（せんじゃもうで）にお参りをしたとか、の記念に張つたのであろう。名前入りの日本手拭（ない）も二すじ三すじ吊つてあつて、風が吹くたびにゆれていた。

拝殿の裏に小さな小屋ほどの建物があつて、そこにいつも髪（かみ）の毛をぼさぼさにした五十歳くらいの、でっぴり太つて、がらがら声の巫女（みこ）が住んでいた。前歯に金や銀を沢山被（かぶ）せていた。

その人は、稲荷の守りをしたり、手相を見たり、時には結婚の世話もしていた。私たちはその人をコンコンさんと呼んでいた。

常の日はお稲荷さんのお詣り客は殆ど見かけなかったが、四月、五月のお祭りの日には、竹中稲荷大明神と書いた赤い幟が沢山鳥居のそばに立てられていた。この日はお詣りが沢山あつて賑わっていた。

拝殿の裏にある赤く塗られた柵の中には、かねがねその洞の中に狐が住んでいる、と言われていた小さな祠が沢山建っている。実際に夜、吉田山で狐が鳴くのを私も時々聞いたし、ここに越して来た当時は、家の庭にも狐が来ることがあつた、と、母から聞いていた。

この稲荷の境内も私たちには遊び場の延長線にあつたので、小さな祠が沢山あることは以前から知っていた。しかし、何となく薄気味わるくて、古ぼけた赤い柵の中へは足を踏み入れたことがなかった。

そこへ、嫌がる私を無理に連れていったのは山のぼんであつた。

小さな祠の一つ一つには、どれもその裾が三尺ばかりの高さまで黒く塗っており、裾になるほど広がっていて、丁度祠が黒い袴をはいているように思えた。その黒い袴の裾には、どれにも狐が出入り出来るくらいの大きさの口が開けてあつた。

覗くと、中には何もなかった。どの祠の扉の前にも小さなかわらけが置かれてあり、油揚げ

団子が供えてあつた。お神酒徳利も供えられていた。お詣りの人や、金齒のコンコンさんがお供えたのであろう。

山のぼんは、先に立つてそこをぐるぐる廻つて、さも得意そうに案内した。私はところどころ地上に出ている松の根をまたぎながら、ぼんについて歩いた。

ぼんは途中で、

「わあ！ 出て来た！」

と、私を驚かせたりした。

祠のある場所は吉田山の一部であり、そこだけひよろ高い赤松の林を切り開いた、山肌の赤土のままのでこぼこしたところであつた。

松と松の間からは、東山が一望できた。大文字山が直ぐ正面に見えた。山を少し下ると、民芸の柳宗悦家をはじめ京大の先生方の家が数軒あるが、ここからは樹木に隠れて見えない。明るい場所であるが、物音一つ聞こえない。いかにも夜になると、殊に月の晩など、祠の中から狐が出て来そうで、自然に足が速まって来る、異様な感じのする所であつた。

ここを通り抜けて、焼丸太を横に渡した細くて急な段々を上り切ると、山のぼんの家の直ぐ横手に出た。

私は、ぼんの家より奥へはめつたに行かなかつた。それより奥はもう本当の山で、私は行か

ない方がいいと思つたからである。奥へ行くのは幾人も集まつてゐる時か、年に一度のお盆の送り火を見に頂上へ行く時ぐらいであつた。

頂上からは東は銀閣寺方面から北山、西山を一望出来た。それで、大文字は勿論のこと、妙法、左大文字、舟、鳥居と、その全部の送り火を見ることが出来た。その日はほんの店も賑わつた。店には氷水に浸けたラムネ、あんパン、かき餅などがあつた。

店の前に葦簾よしずの張り出しが出来て、床几しよくや古い出し板ばんが二つ三つ置いてあつた。葦簾の張り出しからは、年を経た岐阜提灯ちやうちんが数個下がつていた。店の奥には土間の左右に、六疊ばかりの畳の部屋が一つずつあつて、壁にビール瓶を持つた美人の大きな広告が貼つてあつた。右側の部屋の窓ぎわには、ほんの小さな机があつた。

吉田山にはもう一つ、子供たちにとつては、大切な夏の遊び場があつた。そこを、私に教えたのも、ぼんであつた。稲荷の西隣にある椎の木林の中で、京大で使う水の浄水場の濾し余つた水の出口がある所である。

水の出口からは、きれいな水が絶え間なく、少しずつ流れ出してゐた。その前は、赤土が一坪ばかり掘れて、浅い水溜りができていた。拳こぶしほどの小石や砂利があつた。

「蟹かにがいるぞ」と、ぼんが言つたように、二つ三つ小石を退けると、時たま小さな蟹が、軽やかに、横飛びにとび出して来た。しかし、私たちは、それを捕まえて帰ろうとはしなかつた。

そこには蟹がいる、ということだけで、充分満足であつた。

この場所は、自然の沢ではなかつたが、浄水場が造られてから、もう永年経つていたので、誰かが、いつかここに、蟹を放したのが居着いたのか、或いはすぐそばの沢のようになった所に居たらしい蟹が、近くの水溜りへ遊びに来ていたのかも知れない。

椎の実拾い

山の水瀧しは、吉田山や竹中稲荷へ行く時ちよつと覗いて行きたい場所である。稲荷の鳥居を十ばかり潜くぐつたところから五、六歩左へ、小高くなつたところに浄水場がある。入口に門かどのかかつた開き戸がある。戸といっても枠に二十センチばかりの板がはすかいにしてあるだけで、そこへ行けば中はどこからでも見えた。京都大学で使う水を瀧している所である。満々と水を湛たえて、ずいぶん大きな水源地だと見渡したものである。つつじの頃は真赤な花が山へ続いて美しかった。